

BOOKMARK

FREE BOOKLET [ブックマーク]



[ブックマーク]
2023年 春号
Take free

BOOKMARK

さて、今回の特集は「詩」……といっても、19世紀イギリス生まれで児童書も書いているデ・ラ・メア、戦後を代表するドイツ系ユダヤ人の詩人で独特の詩を書いたパウル・ツェラン、ノーベル平和賞を受賞しながらも獄中で死を迎えた劉曉波、スリランカ生まれで先鋭的な詩集で脚光を浴びながらもその後、小説に移行してブッカー賞を受賞してしまうマイケル・オンダーチェ、2020年にノーベル文学賞を受賞したルイズ・グリュックなどの文学文学した詩人の作品もあるし、ロックやラップの歌詞がらみの本もあるし、最近英語圏で注目されている散文詩の形のヤングアダルト作品もある。

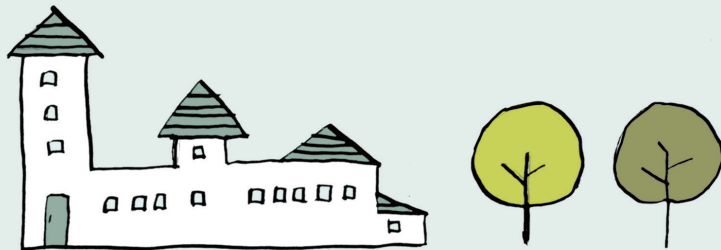
編集者ふたりの好きな作品を並べたらこうなりました、という感じのラインナップ。見事にごちゃごちゃだけど、「詩」といったって、こんなに広いんだぞという面白さ、楽しさを味わってもらえればいいと思う。

とくにぼくは詩が好きで、小説とどちらが好きかと問われれば、即座に「詩」と答えるほど詩が好きだ。だから「BOOKMARK」を始めたときから、絶対にこういう特集をしようと考えていた。それがやっと実現した。

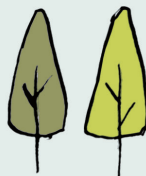
斉藤倫さんの『ポエトリー・ドッグス』は、まるでこの企画を予想していたかのようなタイムリーな出版で、読んですぐに、巻頭エッセイをお願いした。

どうか、世界に平和を、そして詩を!

(金原瑞人)



「詞と詩のあいだにあったもの」



Special Guest

斉藤 倫

Saito Rin



「詞と詩のあいだにあったもの」

斉藤 倫

語学がとくいなんてことはまるでなくて、それでもなぜか翻訳するのが好きで、それはことばオタクのようなぼくの性質からきているんだとおもう。十代、二十代の、暇しかないところに、辞書をひきながら、洋楽の歌詞をひたすら訳していた。だれに頼まれたわけでもなく、まるで答えのないクロスワードを永遠にいじくりまわすような具合で。

たとえば、ニルヴァーナの有名曲。Hello ではじまる、単純なサビのフレーズで、九〇年代の内臓みたいなものをつかみだしている。その単純さゆえに、すごく日本語におきかえにくい。気軽な挨拶に似た底しれぬ絶望を、そこなわずに訳すのは、むずかしくて楽しかった。

ビースティ・ボーイズの Fight for your right なんかも、そうだ。ぼくのルールとしては、おなじメロディで歌われる詞どうしは、おなじ拍数になるように訳す。韻をふんでいるところは、韻をふむ。リフレインも反映する。英詞の拍数や韻にあわせるんじゃなく、構造だけをうつしかえることで、「詞」が曲からきりはなされ、「詩」の音楽性となる。そのうえで、ビースティのやんちゃでどこか知的なかんじを再現しようとした。

ボブ・ディランや、ジョニ・ミッチェルみたいに、詩として完成された歌詞に、食指がうごかなかったのは、「詞」から「詩」が現れる、錬金術

みたいな瞬間に、謎の気もちよさをかんじてたんだとおもう。

時間はむげんで、なんとでもとり返しがつく気がしていたころはとうにすぎて、それでもときどき、この私訳をやってしまう。その無為さゆえに、じぶんの核のようなばしょに根がらみしているとわかる。

ジョン・レノンの「イマジン」とか、ビリー・ジョエルの「素顔のまままで」、ザ・ポリスの「見つめていたい」、クイーンとか、デヴィッド・ボウイとか、だれもがしる、キラーフレーズをどう訳すか。たとえば、名だたる翻訳家のかたがたが、フリップで大喜利をするのを見てみたい。「こう訳したか!」「さすが!」みたいなイベントが、もしあったら、ほんとかぶりつきで。

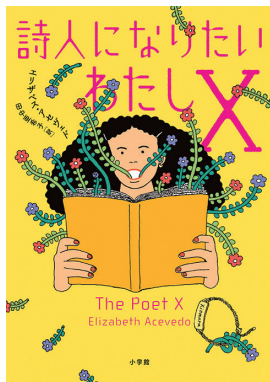
『ポエトリー・ドッグス』

斉藤 倫
(講談社)
¥1,760



[The Poet X]
Elizabeth Acevedo

『詩人になりたいわたしX』
エリザベス・アセヴェド
田中亜希子 訳
(小学館)
¥1,760



15歳の女の子シオマラは、NYのハーレムに住むドミニカ移民二世。父をパピ、母をマミ、とスペイン語でよぶなど、そのくらしにはドミニカ文化が入りこんでいる。シオマラは、信仰やジェンダーや恋愛について自分の価値観を押しつけてくるマミとうまくいっていない。女らしい体つきが注目されるようになってからは、周囲とあまり口をきかなくなった。心の内を吐き出す唯一の場所が、ノート。気持ちを詩にして書いていたのだ。そんなシオマラが、詩を覚えて人前で語るパフォーマンスアート、〈スポークンワードポエトリー〉に出あい……！

物語は、主人公の書いた短い詩が並ぶ形で時系列に進む。15歳の言葉で語られる詩は、ストレートだ。例えば最初の詩は、一行読むごとに、ハーレムの風景がみるみる立ち上がり、スペイン語のおしゃべりや音楽が聞こえてきて、シオマラの気持ちがずっと伝わってくる。全米図書賞やカーネギー賞など英米の主な児童文学賞を総なめにした本書のキーワードは、言葉の力。スポークンワードポエトリーの競技〈スラム〉の全米大会優勝者でもある作者の技が冴え渡るYAを、ぜひ！
(田中亜希子)



[On the Come Up]
Angie Thomas

『オン・ザ・カム・アップ』
いま、這いあがるとき』
アンジー・トーマス
服部理佳 訳
(岩崎書店)
¥1,870

ブラック・ライブズ・マターを描いて全米で大きな話題となった『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ あなたがくれた憎しみ』(アンジー・トーマス著)の姉妹編。本作の主人公は、地元ラップ界のレジェンドだった父親をギャングの抗争で失い、ドラッグ依存症と闘う母親を支えながら、貧困に苦しむ家族を救うためラッパーを目指す少女プリ。黒人に偏見を抱く学校警備員にいわれのない嫌疑と暴力を受けたプリは、ラップに不公平な世間への怒りを込めて歌うが、その曲が批判的になってしまう——。元ラッパーの経歴を持つ作者によって作中にちりばめられたラップが、ストーリーを牽引する重要な要素となっている。前作同様メッセージ性は高く、2019年ポストグローブ・ホーンブック賞フィクション部門オーナーを受賞。銃殺された父親、ドラッグに溺れていた母親、食事のままならない貧困と、設定はかなり重い。主人公はあたたかい家族の愛に包まれながら、どん底から這いあがっていく。大ベストセラーとなった前作に引けをとらない名作だ。

(服部理佳)

[Long Way Down]

Jason Reynolds

『エレベーター』
ジェイソン・レナルズ

青木千鶴 訳

(早川書房)

¥1,980



大好きな兄さんが、銃で撃たれて殺された。15歳の少年ウィルは、兄の遺品である拳銃をたずさえて、復讐に向かう。ところが、エレベーターが8階から1階へおりるまでのわずかなあいだ、各階でとまるたびに乗りこんでくるのは、出会うはずのない「何か」ばかりだった……ウィルはこの出会いに何を思うのか。復讐という負の連鎖を絶ち切ることはできるのか。

自分自身も、親友を撃ち殺された過去を持つという著者。その著者が紡ぐ物語は、ひとりでも多くの若者に声を届けたいという、切実な思いにあふれている。詩の形をとった素朴な語り口からも、タイポグラフィを駆使した斬新なレイアウトからも、その思いがひしひしと伝わってくる。記号をかたどってみたり、あちこちの隅へ追いやってみたり、1ページとして同じ配置のない文字列は、怒りや悲しみ、恐怖で押しつぶされそうになっている少年ウィルの心の揺らぎを、視覚の面からもじかに訴えかけてくることだろう。

新たな読書体験に興味がおありの方にも、ぜひ。

(青木千鶴)



[The Wild Iris]

Louise Glück

『野生のアイリス』

ルイズ・グリュック

野中美峰 訳

(KADOKAWA)

¥2,530

詩が書けず悩む私に「書けない時期があつていい」と詩の先輩がいった。「ルイズ曰く、沈黙の時間も大事なんだから」。

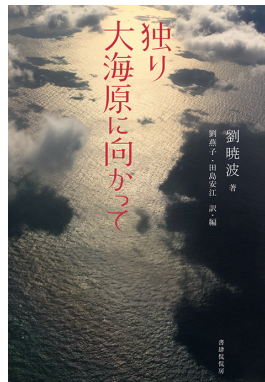
訝しげな私に、いつか3人でお茶を飲みましょう、と先輩は美しく微笑み、詩人ルイズ・グリュックの名前は私の意識にはっきりと刻み込まれた。もう20年以上前のこと。

2年間何も書けなかったグリュックがたった2ヶ月で書き上げたこの詩集は、「苦しみの果てに／扉があった」というアイリスの声で始まる。冬中無言だった球根が、地上に顔を出し、花を咲かせ、新しい声を獲得する再生のドラマ。それは同時に長い沈黙の期間に耐え、花の声で詩を書き始めた詩人の姿でもある。詩集の存在自体が苦しみの果てに現れた一つの扉なのだ。

私は今までグリュックが魂の状態を探る詩人だと思っていた。この一冊を訳してわかったのは、彼女が身体を伴う魂の詩人だということだ。花たちは気まぐれな神の抽象的なアイデアではない。色や匂いを放つ体は「今・ここ」にあり、だからこそ私たちはその生き生きとした喜びや恐怖、切実な魂の祈りに心を揺さぶられる。(野中美峰)

『独り大海原に向かって』

劉 曉波
劉 燕子／田島安江 編訳
(書肆侃々房)
¥2,200



劉曉波が没して5年以上が過ぎた今、世界はますます緊張度を増している。08憲章の起草者として投獄され11年の刑が確定。2010年ノーベル平和賞を受賞したが出席は叶わず。詩集『独り大海原に向かって』を私は劉曉波の遺書と呼んでいる。圧巻は「天安門事件犠牲者への鎮魂歌」。30年経っても1989年6月4日の天安門事件の全貌は明らかにされていない。広場を埋め尽くした若者たちは一斉射撃を浴び、戦車に轢き殺された。毎年、六・四には劉曉波の追悼詩がネット上にアップされ、彼の死まで続いた。無残に殺された若者たちの死を無駄にしないためにも劉の詩を読んでほしい。

彼の詩を読むたびに自分の無力さに気づく。劉もまた、毎年、自身の無力さに歯ざりしながら、言葉だけで闘い続け力尽きた。昨年暮れ、中国でゼロコロナに抗議して全国一斉にデモやストライキが起り、天安門事件の再来かと騒がれた。何かあれば、一斉に火の手が上がり、また収まる。世界の紛争地はどこも同じ。だが、命がけで遺した彼の詩は今なお私たちに武力では決して平和は訪れないと告げている。

(田島安江)



[Peacock Pie]

Walter de la Mare
Edward Ardizzone

『詩集 孔雀のパイ 改訂版』
ウォルター・デ・ラ・メア 作
エドワード・アーディゾーニ 絵
間崎ルリ子 訳
(瑞雲舎)
¥2,200

「だれかがドアをノックした」と私が口にしたとたん、きいていた子どもたちがハッと、図書室の入り口のドアのほうをふり返りました。ある小学校の四年生のクラスにおはなしをしに行った時のことです。

瞬時にできてきているものの耳と心をとらえ、いや応なくその詩がつくり出す世界の中にさそい込むという特質を、デ・ラ・メアの詩の多くが持っているように思います。

「だれか」や、「ああ、なんと!」、「戸棚」などの幼い心にすぐ響く詩から、「コマドリ城の夜盗」のような物語詩、「小さな緑の果樹園」や、「ニコラス・ナイ」のような田園詩とでもいえるような雰囲気詩、そして「妖精」、「メルミロ」、「影の歌」などのファンタジーあふれる詩、「だれも知らない」、「いつか」のような思索をさそうような詩などなど、デ・ラ・メアという詩人は何と豊かで深い世界を私たちに見せ、体験させてくれることかと思えます。

詩は目で読むより耳から聞いて楽しむものだと思います。声に出して、耳からことばの響きを感じながら味わってほしい詩集です。

(間崎ルリ子)

[The Dreamer]

Pam Muñoz Ryan
Peter Sis

『夢見る人』

パム・ムニョス・ライアン 作
ピーター・シス 絵原田 勝 訳
(岩波書店)

¥2,640



ノーベル文学賞を受賞したチリの詩人、パブロ・ネルーダ (1904-73) が、まだネフタリ・レジェスでしかなかった幼いころの日々を、自伝に残されたエピソードをもとに、若い読者むけに描いた作品。ところどころに原作者パム・ムニョス・ライアンの詩をはさみ、ピーター・シスのイラストをふんだんに用いて、ネルーダが「希望の色」と称して好んだ緑色のインクで印刷した美しい本です。

雨の多いチリの山すその町で育った幼いネフタリは、男は強くあれと求める父親から厳しいしつけを受けながらも、自然や周囲の人・物への暖かい眼差しを育み、空想の世界に想いを馳せる「夢見る人」でした。美しい物への賞賛は詩人としての素地となり、弱者への共感のちの政治活動へとつながっていきます。この作品では、そうしたネルーダという人物の萌芽がネフタリ少年の目を通して描かれ、人間の優しさや繊細さ、想像力の可能性を肯定しています。巻末にはネルーダの詩も収録。イラストも、フォントや印刷、装幀も、まるごと詩心にあふれた一冊です。

(原田 勝)



[Dead Poets Society]

N. H. Kleinbaum

『いまを生きる』

N・H・クラインバウム
佐々木早苗 訳

(ポプラ社)

¥803

1989年に公開されたアメリカ映画のノベライズ本。映画で主演のキーティング先生役を務めたのは、名優ロビン・ウィリアムズ。アカデミー賞で脚本賞を受賞した作品だ。

1959年、アメリカ、バーモント州の厳格な名門寄宿学校に、型破りな英語教師ジョン・キーティングがやってくる。彼は詩や小説を「人間の生きる糧」だと熱く語り、「いまを楽しめ。人生をすばらしいものにするんだ」と生徒たちを鼓舞し続ける。それに影響された7人の生徒が、学生時代にキーティングが作った〈死せる詩人の会〉を復活させる。彼らはひそかに寮を抜け出し、古い洞窟に集まっては、詩を書いたり、朗読したりをくり返す。こうして詩を通じ、生きる喜びを追求していくうちに、恋や芝居に心を奪われる者も現れる。この時代、それまで親や学校に逆らいたくても逆らえなかった若者たちが、「自由に生きる」ということについて考え始めるのだ。

しかし、今も昔も自由に生きるのはむずかしい。それでも、最後に次々と机上に立つ生徒の姿に、自由という芽のたくましさを感じずにはいられないはずだ。

(佐々木早苗)



[Paul Celan Gesammelte Werke ほか]

Paul Celan

『パウル・ツェラン全詩集 I・II・III』

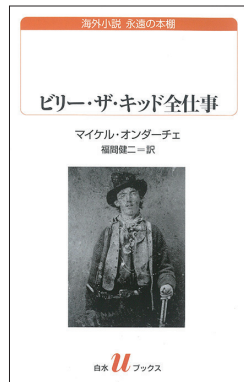
パウル・ツェラン

中村朝子 訳

(青土社) I・II ¥7,480 | III ¥5,280

パウル・ツェランは1920年、旧ハプスブルク帝国領ブコヴィーナ地方に東欧ユダヤ人として生まれ、両親・知人・友人を強制収容所で失い、彼自身は労働収容所での過酷な肉體労働を体験した。後半生はパリでドイツ語による詩を書き続け、1970年、セーヌ川に投身自死した。彼は詩作によってホロコーストの記憶を忘れ去られることから救おうとした。彼の記憶はユダヤ人だけでなく、すべての不条理な運命を背負わされた者たちの記憶へと普遍化されていく。それとともに彼の詩の言葉はどもり、つかえ、切れ切れとなり、詩の言葉そのものに想起される者たちの蒙った苦痛がくっきりと刻印されていく。そうしたツェランの詩は確かに近づきやすくない。だがツェランは詩を独白ではなく、あくまで対話として書いた。ツェランの詩においては自分自身、愛する者たち、神、イスラエルだけでなく、読者もまた「お前」と呼びかけられる。ツェランの詩の読者は死者たちの記憶を共有することによって、互いに結びつき、真に人間的な社会を生み出すことが求められているのである。

(中村朝子)



[The Collected Works of Billy the Kid]

Michael Ondaatje

『ビリー・ザ・キッド全仕事』

マイケル・オンダーチェ

福間健二 訳

(白水社)

¥1,540

『ビリー・ザ・キッド全仕事』について、いままで言ってなかったことをひとつ言うと、これを訳したとき、詩を書きながら映画を撮りたくてしかたなかったほくにとつて、詩人オーダーチェが小説に向かっていく過程で生まれた作品であること以上に、あたかも映画を作るように「編集」された作品だと感じたことが大きかったかもしれない。ビリー・ザ・キッドの物語は語りつがれ、すでに何度も映画になっていた。オーダーチェ自身の、スリランカの金持ちの家に生まれてからカナダの詩の世界に仲間入りするまでの感情的な起伏が、それにどうクロスするか。勝負のひとつはそこにあったと思う。のちに『映画もまた編集である』という本も出すオーダーチェの、不必要なものを切りすてて出会うべきものを確かに出会わせる「編集」の方法が功を奏している。切り離されているものをつなぐのが「編集」だとして、それによってビリーの生きた世界をひとりが見ているのではない夢として再構成しているのだ。

(福間健二)

[지금 장미를 따라 - 문정희 대표 시선 より]
문정희

『今、バラを摘め 文貞姫詩集』

文貞姫
韓成禮 訳

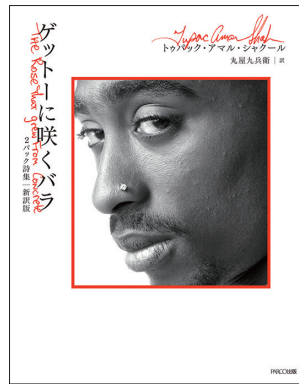
(思潮社)

¥2,640



ムン・ジョンヒ
詩人の高橋睦郎は「文貞姫は、たまたま韓国の地で生まれただけ。彼女の本当の故郷は詩の国なのだ」とかつて評した。韓国の女性詩人の中で、文貞姫は世界でもっとも知られる詩人だろう。韓国的な感覚とともに、誰もが共感できる詩語と感性を持ち、その作品は国境を越えて愛されている。彼女は、身体にまつわる道德的観念を否定し、大胆な文体を用いて女性の実存的・社会的自我を形象化してきた。韓国において、ジェンダー問題に直接踏みこんだ初めての詩人と言えるのではないか。さらに、ジェンダーやフェミニズムにとどまらず、生命意識と結びつけた女性性として表現しているのも特徴だ。男性中心、西欧中心の価値観は、世界や環境、人間の精神を荒廃させており、それを女性の柔らかな力で生き返らさなくてはならない、そして人間と自然、人間同士の間で生命の結びつきを深めなければならない、という世界観である。資本に支配された身体、エロ的な身体、子を生む身体など、さまざまな角度から女性の身体を描き出し、女性という存在に光をあててきたのである。

ハン・ソンレ
(韓成禮)



[The Rose That Grew From Concrete]

Tupac Amaru Shakur

『ゲットーに咲くバラ

2バック詩集 新訳版』

トゥパック・アマル・シャクール

丸屋九兵衛 訳

(PARCO出版)

¥1,650

同業者に尊敬される音楽家がミュージシャンズ・ミュージシャンなら、高名な詩人ニッキ・ジョヴァンニに讃えられ、やはり誉れ高きマヤ・アンジェロウとの邂逅もあったトゥパック・アマル・シャクールは、ポエツ・ポエトだろうか？ もちろん彼は96年に25歳の若さで銃殺された「2バック」、1000万枚売上アルバムが2作もある人気ラッパー。だが、件のニッキもマヤも音楽を発表してきた身、「詩とは音楽」「音楽とは詩」という当然の事実を改めて教えてくれる交流でもある。本書はそんなトゥパックの詩集、ラッパーとして歩み始めた10代末の彼がポエトリー・ワークショップで書いた作品を集めたもの。のちの「ギャングスタ」イメージとは程遠く、歩道のひび割れから生えた薔薇に自分を重ね合わせるほど青臭い若気の暴走がここにある。だがその若造は、キューバ亡命者も輩出したブラックパンサー党の幹部一族出身で、米共産党に関与し「マルコムXの後継者」を自認する社会派詩人。自国を AmeriKKKa と呼ぶ彼の言葉からは、未完の黒人解放運動が匂い立つ。

(丸屋九兵衛)

[The Motherlode:
100+ Women Who Made Hip-Hop]

Clover Hope

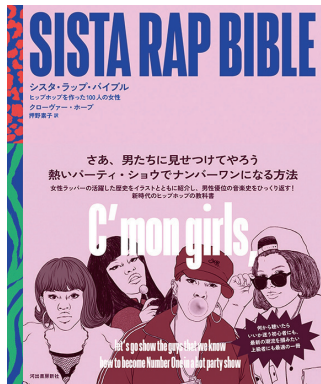
『シスタ・ラップ・バイブル
ヒップホップを作った100人の女性』

クローヴァー・ホープ

押野素子 訳

(河出書房新社)

¥3,289

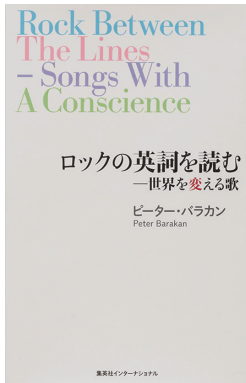


ヒップホップで育った女性が、カルチャーの中で自分をどうとらえ、身の回りで起きていることをどう見てきたか？ 女性アーティストの視点を通じて、ヒップホップの物語を伝えることに主眼を置いた画期的な一冊。もちろん、著者もイラストレーターも黒人女性だ。

女性ラッパーが100名以上紹介されており、240ページにおよぶそのボリュームからも、女性ヒップホップの歴史はこれまで「語られていなかった、書かれていなかった」だけであることが分かるだろう。

「男性優位な業界の中で奮闘してきた女性たちの歴史書」としても、「女性ラッパーの略歴や代表曲のデータベース」としても「女性ラッパーのイラスト集」としても楽しむことができる本書だが、詩の魅力を味わえるのはテーマ別に抜粋されたリリックのコーナーだ。「卑猥なリリックの数々」、「歌の中でお金を要求する女性たち」など、「声に出して読めない英語」の最たるものではあるが、これぞリアル・ヒップホップの真骨頂。下品だと敬遠せず。そして実際に、彼女たちの生命力、ユーモア、反骨精神、知性を感じてほしい。

(押野素子)



『ロックの英詞を読む一世界を変える歌』

ピーター・バラカン

(集英社インターナショナル)

¥1,650

日本では洋楽好きの方でも多くの人は英語の歌詞が分からないと言います。それは無理もない話ですが、その結果サウンド的な魅力とは別に歌われている内容が注目に値する珍しい数の曲が十分に認知されずに終わります。自分が歌詞に感激した曲を一人でも多くの方に知って欲しい気持ちから書いたのが『ロックの英詞を読む一世界を変える歌』でした。

実は本のタイトルに若干嘘があります。「ロック」ばかりではなく、ソウル、ブルーズ、フォーク、ジャズ、レゲエの曲まであり、テーマ的には人種差別、戦争反対、偽善、不理解などがあります。こういった題材の曲を作るソングライターたちは英語圏では皮肉を用いることが多いので、ネイティブの英語話者以外には分かりにくいです。この本では例えばランディ・ニューマンやモーズ・アリスンのような皮肉の達人たちの原詞にほかの翻訳を並べ、分かりやすく解説を加える形でその表現の素晴らしさを伝えようとしてしました。また英語特有の韻の踏み方は日本人にはなかなか気づかれない要素ですが、韻をうまくこなすことがソングライターの評価を左右するものなので、その技法にも触れています。

(ピーター・バラカン)

[Love That Dog]

Sharon Creech

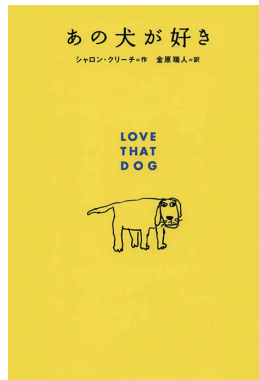
『あの犬が好き』

シャロン・クリーチ

金原瑞人 訳

(偕成社)

¥1,320



ぼくは日本語の詩は大好きなのだが、英語の詩が苦手だ。とにかくわからないのだ。日本語の詩とはとても仲がいいのに、なぜ、英詩がこれほどぼくによそよそしいのか、まったく見当がつかない。しかし、事実なのだからしょうがない。

ところが、この本を読んだとき、うれしくてたまらなくなった。「詩なんて、女の子のものだよ、そんなもの書けない」といった男の子が学校で有名な詩を読まされて、わかんないわかんないといっているうちに、なんとなく、なじんでいって、自分でも詩を書くようになる。なんとなくぼくと英詩の関係に似ていて、それが楽しくて、所々に差はさまれる「名詩」もわからないなりに訳していった。そしてこの作品の最後がまた、かわいくて、切ない。じつは斉藤倫さんの『ポエトリー・ドッグス』ときれいに重なるのだ。英詩アレルギーが少しましになったのは、この本のおかげだ。「えーっ、詩？」と知っている人にこそ読んでみてほしい。この本を訳さなかったら、最果タヒさんの力を借りて、サラ・クロッサンの『わたしの全てのわたしたち』にチャレンジすることもなかったと思う。
(金原瑞人)



[Toffee]

Sarah Crossan

『タフィー』

サラ・クロッサン

三辺律子 訳

(岩波書店)

¥2,310

これはぜったいに横書きで訳したかった。

父親から逃れて家を出た高校生アリソンが逃げこんだ先は、認知症の老女マーラが一人で暮らす古い一軒家。そこから二人の奇妙な同居生活が始まる。マーラは、アリソンのことを若いころの親友タフィーだと思こんでいるようだ。でも、彼女の記憶はまだらで、とつぜん何もかも忘れてしまったりもする。

記憶が少なければ、そのぶん
やさしくなれるのかもしれない

嫌な人間になった理由を忘れるから。

わたしたちとはちがって
マーラはその日その日を生きている
夢や不安にとらわれることなく。

詩の形でなければ、DVや認知症、貧困といったテーマがもっと表面的・露悪的になってしまったかもしれない。ゆっくりと体にしみこんでいくような力を持った作品だ。
(三辺律子)



BOOKMARK 20

【ブックマーク】 2023 SPRING

2023年2月発行

印刷：グラフィック

URL : kanehara.jp/bookmark/

Twitter : @bookmarkFB | Facebook : facebook.com/bookmarkfreebooklet/

編集・発行

金原瑞人 (法政大学教授・翻訳家)

2015年9月に1号が出て、2022年に特別号が出て、今年、20号が
出ました。「BOOKMARK」、これでいったん幕を閉じたいと思います。

応援してくださった書店のみなさん、図書館のみなさん、そして一般
の読者のみなさん、ありがとうございました。これからも海外の本を
よろしくお願いします。

また、巻頭エッセイを書いてくださったみなさん、紹介文をお寄せ
くださったみなさん、本当にありがとうございました。みなさまのます
ますのご活躍を楽しみにしています。

編集

三辺律子 (英米文学翻訳家)

いつもは「次号の特集コピーを決めなきゃ！」となるのに、今回はそ
の必要がないのがちょっと寂しいです。みなさま、本当にありがとうご
ざいました。海外文学がずっとずっと読まれますように。

イラスト・ブックデザイン

オザワミカ (イラストレーターとかいろいろ)

たくさんの方が「BOOKMARK」を読んでくださったことをうれしく思い
ます。読者の方、ご協力下さった大勢の方々に深くお礼申し上げます。

協力 宮坂宏美 / 田中亜希子 / 中村久里子

special thanks to 酒井謙次 / (株) ライブラリー・アド・サービス

本文中の書籍の定価は消費税 10%を含んでいます